記者会見で陳謝する北電の阪井一郎副社長（中央）ら
＝24日、札幌市内

泊原発 放出量を過少報告

31年間 放射性物質 実際は倍

北海道電力は24日、泊原発（後志管内泊村）から大気中に放出している排ガスに含まれる放射性物質の量を、31年間にわたり誤って国や道などに報告していたと発表した。算定ミスが原因で、実際は報告してきた数値の約2倍の量を放出していた。

北電は、正しい数値でも国が定めた目標値を大幅に下回っており「人体や環境に影響はない」とするが、原子力規制庁は、原発の運用ルールを定めた保安規定違反に当たる可能性もあるとみて調査を進める方針。

泊原発では、発電所内の保守管理に使う雑巾や布などを敷地内の放射性廃棄物処理建屋の焼却炉で燃やし、放射性物質を含む排ガスを放出する。放出量測定時は設備を傷めぬよう、放射性物質を含む排ガスと同量の空気で濃度を薄めた上での採取が認められている。正確な放出量算定には、薄めた分の補正が必要だ。

しかし、北電は泊1号機の試運転が始まった1988年10月以降、放射性物質トリチウムなどの量について補正していない数値を報告してきた。今月17日、原子力規制庁から指摘を受け、20日に誤りを確認した。測定のマニュアルに補正に関する記載がなかったという。

札幌市内で24日記者会見した北電の阪井一郎副社長は「道民の信頼を損ねる結果となり、心からおわび申し上げる」と陳謝。「長年見過ごしてきた原因を早期に究明し、再発防止策をまとめる」と述べた。

北電の対応について、泊村の牧野浩臣村長は「住民の安心安全につながる重要な数値。北電の安全管理に対する姿勢に問題がある」。後志管内岩内町の木村清彦町長は「大変遺憾だ。地域住民への説明責任を果たしてもらいたい」と不快感を示す。

原発の危機管理に詳しい広瀬弘忠東京女子大名誉教授（災害リスク学）は「放射性物質の正確な放出量を把握できないまま原発を稼働していたという恐ろしい話。北電は危険な物質を排出しているという認識に欠けている」と指摘する。

北電は、泊原発3号機の非常用ディーゼル発電機の制御盤が9年間接続不良だった保安規定違反問題について、11月に再発防止策を示したばかりだった。

（佐々木馨斗、久慈陽太郎）